

天津
526

風月外傳序

酒之為物能消憂而忘事趣則
通大道一斗自然若不知其趣則
志爛腸亦生憂也夫風月外傳
筆取真趣者物久之逸游而於人

序

間之娛樂也然則何以取之趣焉中
世遊治之遊以打拳呼數之戲杯酒
勸蓋生始自審人出而崎嶇人相
傳云今也升平日久百慮亦競都
會之地遊於此戲者不少五言浪蕩

風月外傳序

酒之為物能消百憂而忘千趣
通大道一斗六自然若不知其趣則
志爛腸亦生憂也夫風月居靈
華取其趣者物久之逸游而非人

間之娛樂也然則何以取生趣焉中
世遊治之遊以打拳呼數之戲杯酒
勸蓋生始自蕃人出而崎江之人相
傳云今也非平日以百靈亦競都
會之地遊於此既去不少吾浪蕩

志為夢名結社促者余所識波
者以此我若于時焉波高潮好文學
近著亦尖岸之譜名曰九月多傳
事徒物梓行乃憲序於余之志
不閑於身哉何足共議然而觀此存

別攘臂以相鬪之氣象勃然起
者當因是知以我之之所善無間
然矣後之遊於此越之能讀此書
而呼數弄指以勸杯酒只道大廷
合自然之趣漸可出而已苟知真趣

則物外之遊何雅懷之有凡月夕傳
之君亦不宜乎

辛卯冬十一月路警海溪人識

駿臺山圖南書



賦拳侑

富雄

卜彼計吾先魁賢其爭君子色

莊筵射行禮飲饗行侑纖手風

派真可憐

咏打拳

永後志

良醞玉盤裡掌中敲自今仙家

何所鬪醉後亂紛紛

又

彫蟲山人

一望二階三里程
四隣五欲六
塵榮七賢八達
九天樂十盞解
拳歌無聲

又

南海老人

隻々玉手與轂齊
主客相爭東
又西巧拙莫論吾
未健罰杯多
處醉如泥

蘭渚

隻眼送盤上一聲
分掌中三杯
餘酒色四顧任流風

又

雷聲山人

春探東苑秋嘯南樓月此物為

驕人罰杯興徧發

花

雪日波高亭飲 芥亭主人

雪滿章臺玉樹清一枝未折取

多情纖手携來琴兼瑟風流調

作斷腸聲

詠酒拳

松永二卿

曾聽雲南麴米春江南才子故

相親牀頭酒令五峰手幕裡奇

兵一寸神行處名聲無敵者巖

時珠玉混煙塵重來不與吏蘓

事唯有朱杯掌上新
不與
又
化髮生

一觥籌數屈伸前
玉筍柔荑兩
兩連張陣印圖
隨戟手當場豪
氣在尊拳輸來
豈道罰無罪羸
得還堪誇有權
煖閣紅爐春可

戰仙方寧用不龜儻

又

海濱隱者

柔拳非打敵十指
互相移工拙
豈無分輸羸似
有時罰同金谷
酒醉異玉堂
危因想江南
賞梅

花次第披

呼四云
梅四

弦

重藤
弓長
二尺
三寸

弓ハ大開ハ優美
子出ス弦ハ剛筋小
結ハ扇子ヲ出スニ

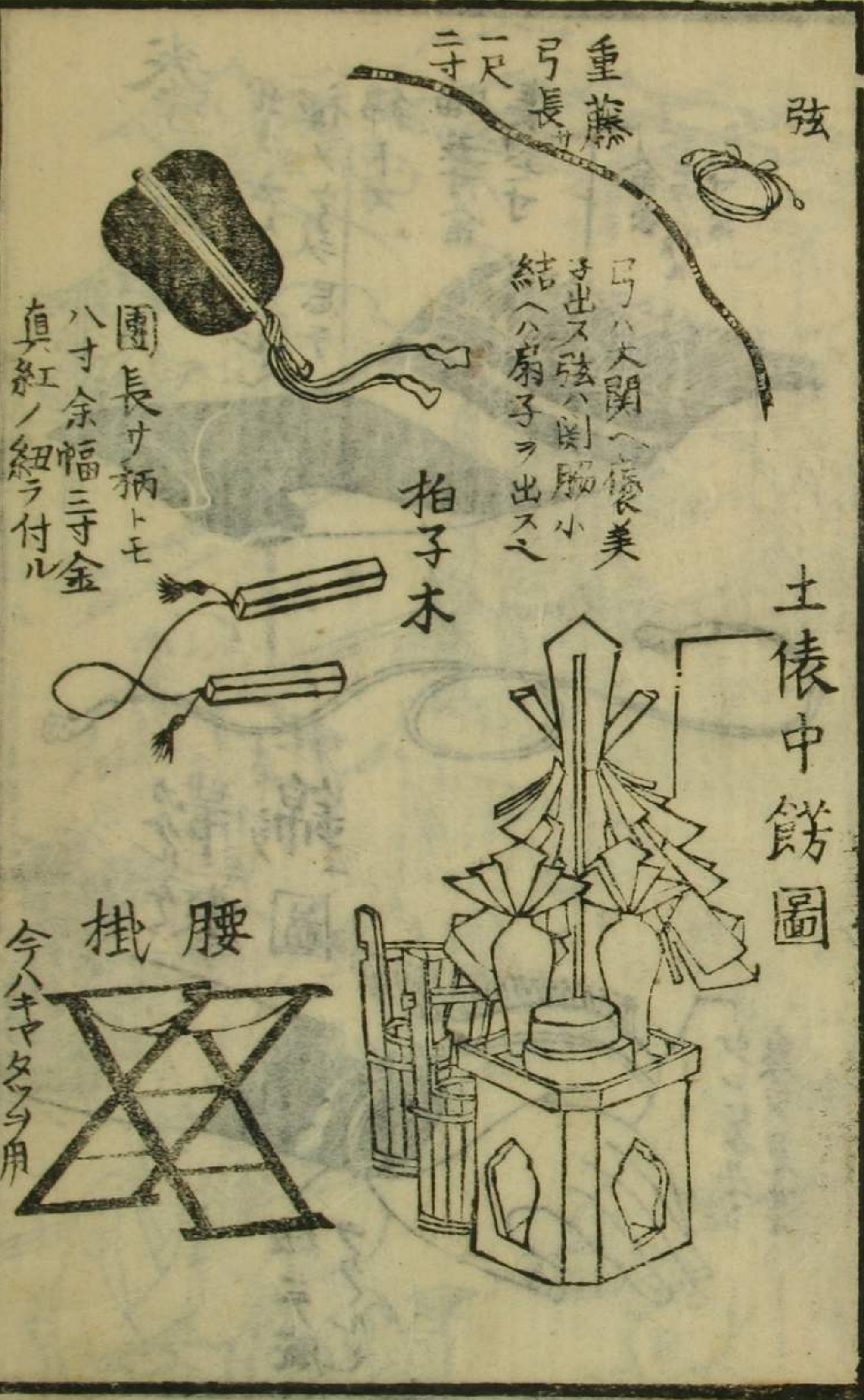
拍子木

團長サ柄トモ
八寸余幅三寸金
真紅ノ紐ヲ付ル

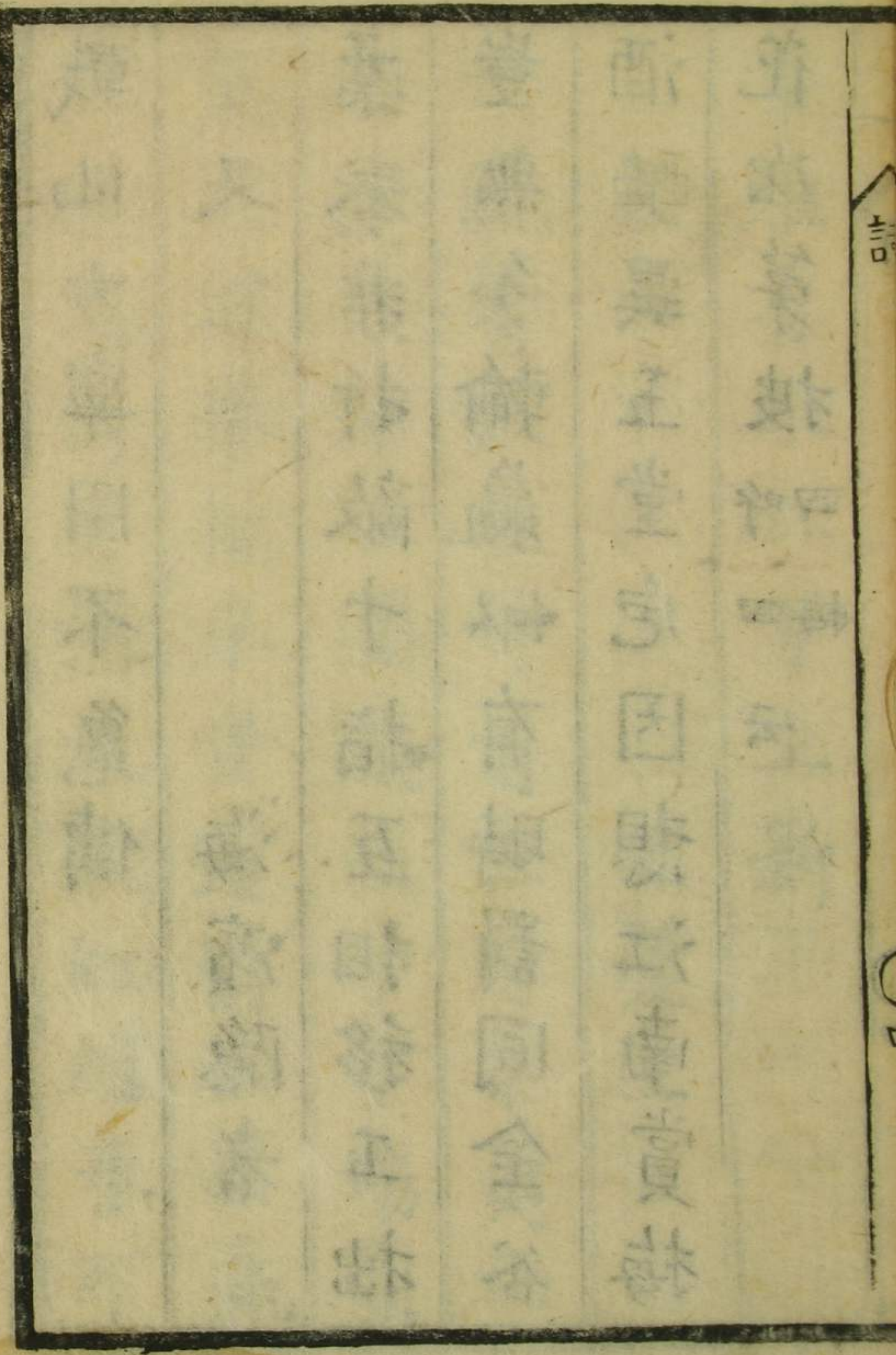
土俵中餅圖

腰掛

今ハキヤ多ク用



言





拳錦

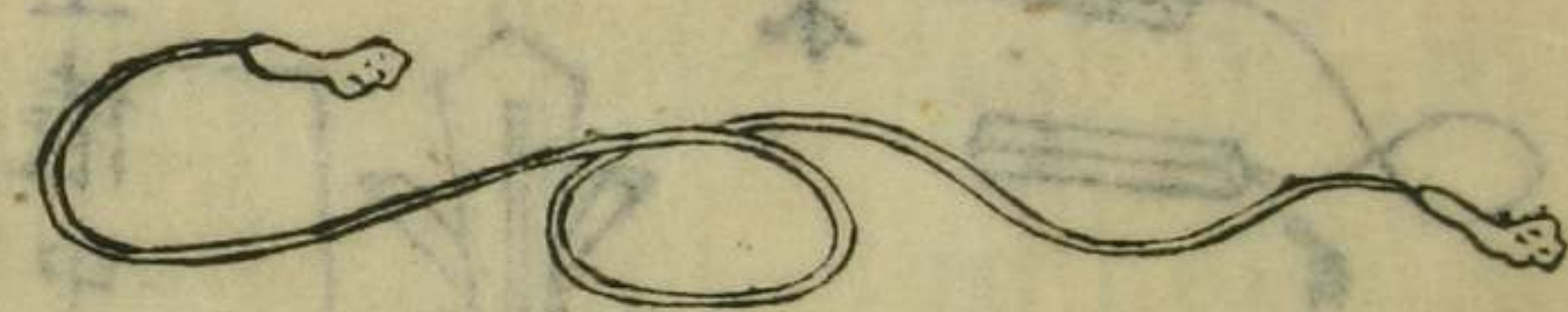
世ニ云ケシニハシメ
禪ノ字ヲ忌テ

錦トス

幅五寸余

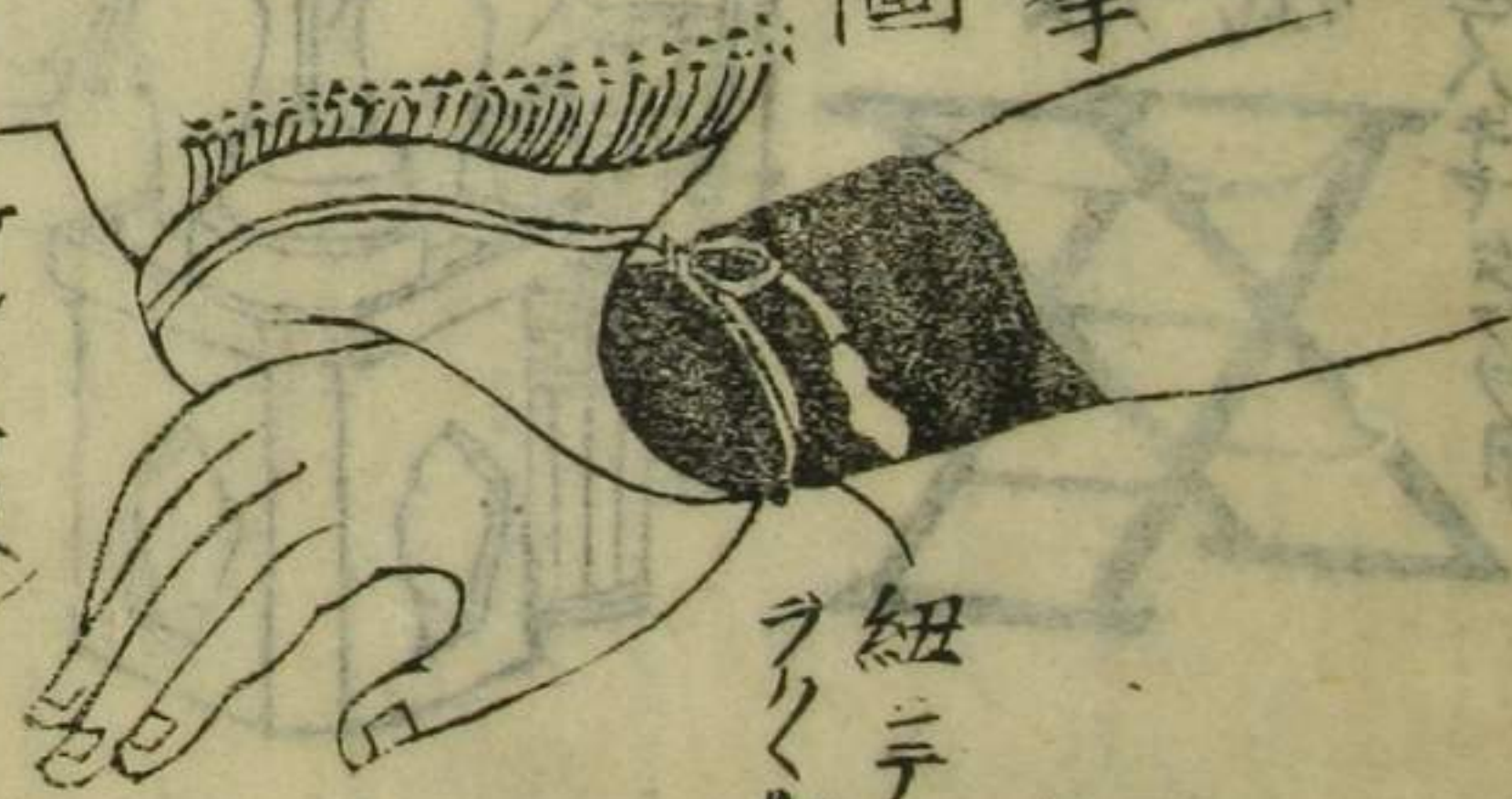
長サ七寸

金糸
ニテ作ル
一寸余



錦帶
圖拳

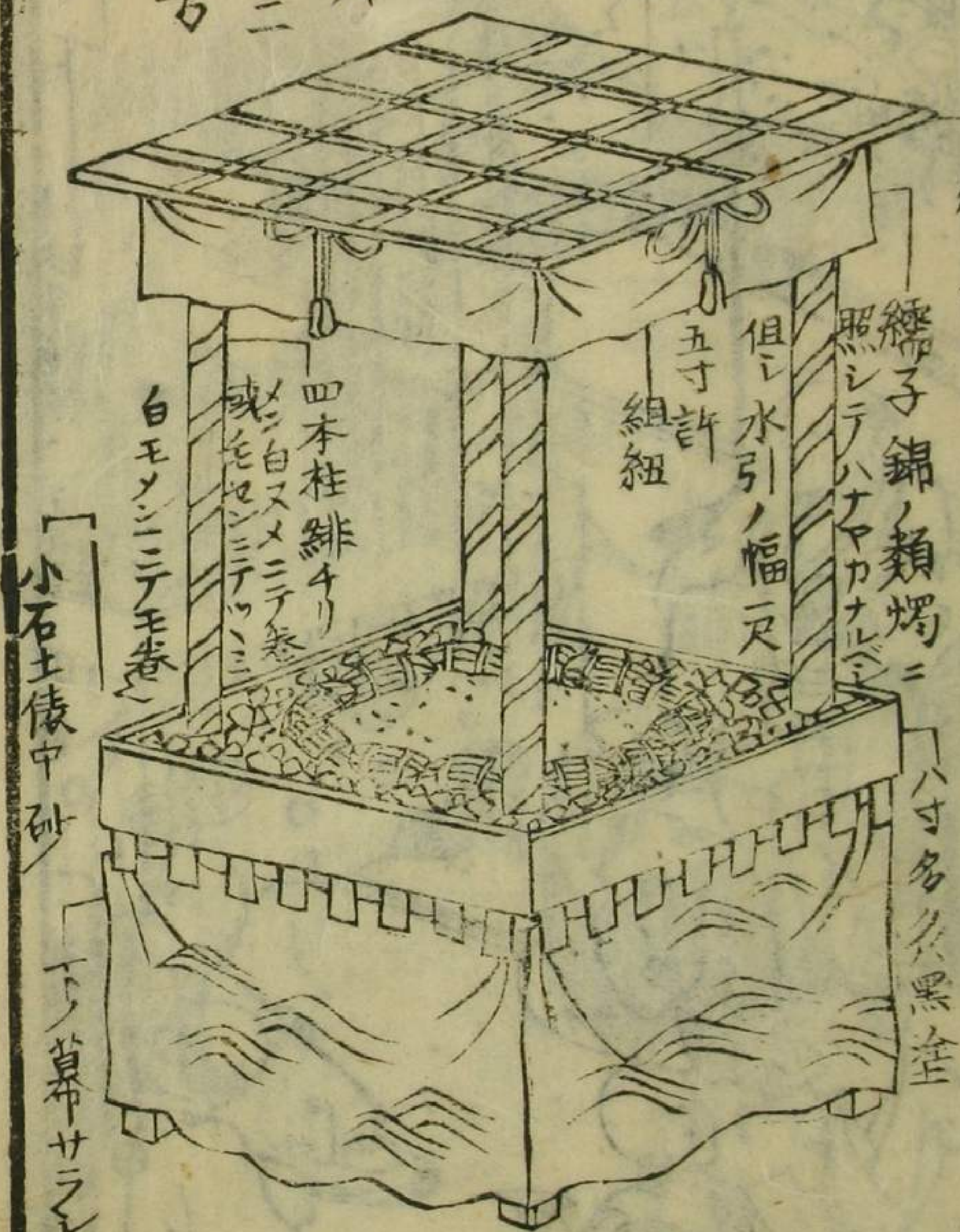
少シハ子カヘシ
裏ヲ見セシ



紐ニテ腕
ヲクルシ

拳盤圖

惣高六尺余但二尺四寸四方也



組子障子二寸ワ盤ノ外へ出ス

八寸多ク黒塗

風月外傳卷上

浪華 菊社 波高 述

同社 若松 菊妙 全校

近世酒席の興小打拳乃戲あり
 人乃戲をもちよし吾博文小あり
 一審小ナリとるりけりつべたがら
 を合し席を用て甲乙を競ふと事あり

一日友人來うそは戲の事を向よりてそを
 を語らふしそふ等して犯訂正を請ふ二三
 乃論議りそらへるが小雌黄してそのを
 増りゆわしそらけりそ宮中傳て好事
 乃機を考ふるを法社中乃子弟ら此を辨
 して初ん乃階梯の備んとはるさ此は臣
 一時乃襍劇を考り案に於てとていふも
 好てあそぶ遊べいとは法をさ小阿は法は礼

なり礼を考るべき色の席小際志を次彼か
 たりまやあま乃氣象へ各主人よりあそび
 傳りて少あつ次志はあそび年未可戲小遊
 てんを用由色い自然小法法をほきんいあそ
 ころれ案かこもそ乙手控得るはあそび遊り
 らちてはるふそ遊んもほあそび次相あそ
 なる先法はつとあつて子とそたつ傳りぬ
 必だり先は遊そ人乃親を相づあ小阿は

世にいはさくはさきまらざる初めの事引いてやう
 くふもむ志をりをたんとはあらず侍らざるん
 儻へはさきまらざる人ハ書ふよりそらばり
 せらるるそらるる乃名をあやむ未だく
 打込ぬ免たまりて吾黨乃幸甚一かさん
 凡巻を打法、法者乃知り終るはをんども
 問ふ水はばりむらたぬ人ありてそを志
 ありどもそらるる人も問ふくくははる小

其器をたつて人あり故小なりぬる法を
 擧てはく小業を買乃多をたつては
 一拳を打んとはむふ人の先を掛るを
 晴記まら

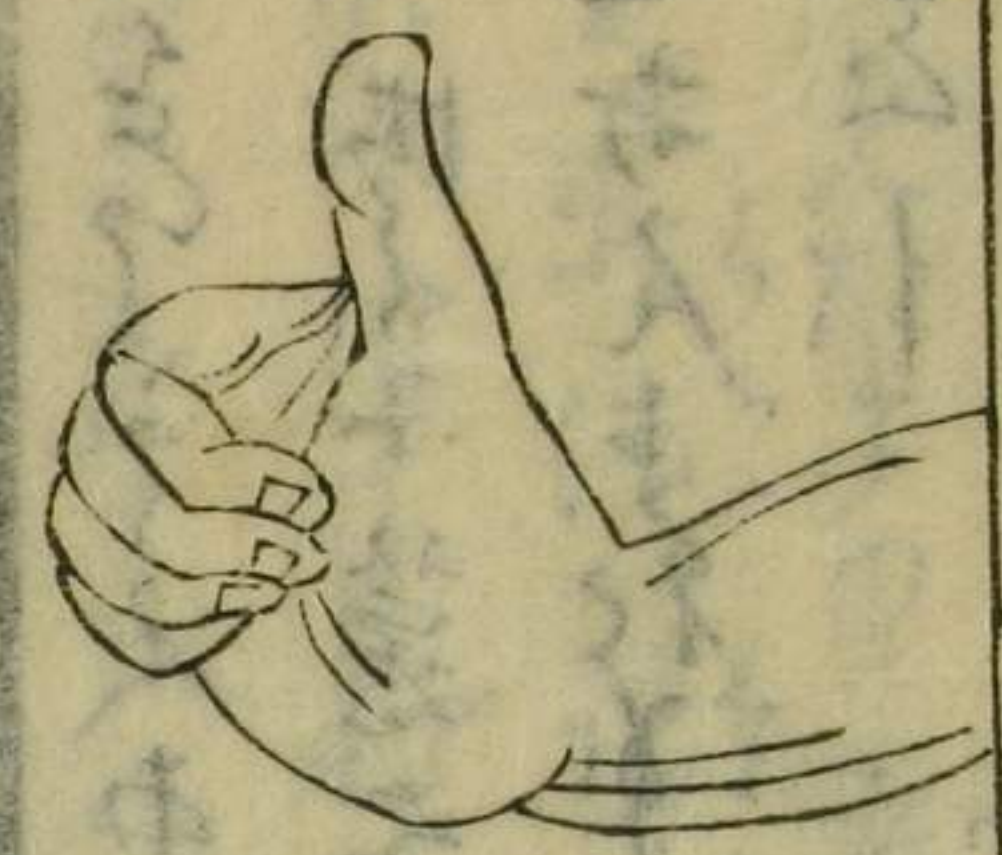
- | | | | | | | | | | |
|----|-----|-----|----|----|---|----|----|---|-----|
| 一 | イッコ | リオン | サム | スウ | ウ | リウ | 千五 | ハ | クワイ |
| 二 | | | | | | | | | |
| 三 | | | | | | | | | |
| 四 | | | | | | | | | |
| 五 | | | | | | | | | |
| 六 | | | | | | | | | |
| 七 | | | | | | | | | |
| 八 | | | | | | | | | |
| 九 | | | | | | | | | |
| 十 | トウ | ライ | ムテ | 乃 | 二 | 声 | ハ | 和 | 法 |
| 無手 | | | | | | | | | |

右の巻をそらりておろしぬるをそらるる

小圖解... 考へ指の...
學之

發聲進指圖

圖一打



圖二打



圖三打



圖四打



圖五打



圖手無打



右の圖をらんて 指を出し 声を掛る乃 廻るを
 不 せん人と對して 打べし 勝負の次才
 ハたどくば ちよの人の無を 押して イッコウと
 音を掛る 是 ちよ乃人を 勝と 次は 意ハ
 あらう イッコウを 掛るを ちよイッコウ
 乃 音を けりて 初の無を 合して イッコウと
 ちよへ 取 ちよの 勝と 次又 ちよイッコウ
 コウと 音を 掛る ちよイッコウと

音を 掛る 合 奏 乃 勝負 乃 次 又 音
 あらう イッコウを 出 次を ちよイッコウと
 音を けりて ちよの イッコウを 合し 取 人
 是を 勝と 次 又 ちよを 合し 取 指
 を リヤニと 音を けりて 出 せば ちよイッコウ
 なり 是も ちよを 合し 取 ちよイッコウ
 イッコウと 音を けりて 指を 出せば ちよイッコウ
 勝 ちよイッコウと 合し 取 ちよイッコウ

指す急ぐ一但一はち小うて大旨を以
 て後は道を知りて人よむひて尚正
 ちば即そを家を知りてやがて勝負の場
 小臨むり物べくまを己よ合せ方を解
 せむ指れ出ーやうを記し立る此のよべー
 是をそぶ小捷徑あり竹まで目南乃半
 を五本くくく水をおひへつささー對
 とくそ急ぐをのけ指をさくめて試むべし

能指乃はのひやう急ぐのかけやうを熟き
 此道よ級する方言を急ぐ一くまを切
 要乃そよのそむひて初心の傳とせ
 一ハグルとらひはきハ氣家乃たさし想を
 當ふ故よむの人の人たひ違入剛のまめえ
 ともやうもおそ身がたまふ痛いとまらま
 小指を打べし物で打合時むり乃人感
 といを指うまらめを打べし水を指り

度くも又えどもともいつあり
 一モドリとよみたるは一ツより五を出し又五
 より一ツへえきとゆふ之きも又まづモト
 リをわりけくハ指曲と名く之何なりた
 當時の機ハ無^じては^りズ一
 一オレデとよみハ一^一手を筆度ハ出^しを
 つゝ又ハ一^一を^一を筆度ハ出^しを
 ハ甘く目よ立て取^るを^一多^く一^一む^一

一^一ハ^一と^一も^一を^一ま^まむ
 志^しの^しれ^れども^も箇^{くわ}様の^{やう}場^ば々^々縮^{ちぢ}ん^んて^てハ^ハ脚^{あし}の^の指^{さし}を
 取^とる^るも^もハ^ハ不^ふ満^{まん}つ^つを^をの^のこ^こま^まの^のざ^ざら^られ^れら^らへ
 せ^せん^ん要^{えい}なる^るべ^べし
 一^一大^{おほ}い^い小^こ手^てと^とら^らふ^ふハ^ハ四^よ三^{さん}五^ごを^を毎^{まい}度^どけ^けを^を大^{おほ}手^て
 と^とら^らふ^ふ小^こ手^てと^とら^らふ^ふハ^ハ三^{さん}より^{より}下^{くだ}一^{いち}二^にム^むテ^てな^なを^をつ
 り^りを^を以^もつ^つて^て大^{おほ}い^いハ^ハけ^けり^りハ^ハや^やり^りハ^ハよ^より^りて^て目^めよ^よま^ま
 て^て取^とる^るも^もハ^ハ間^まあり^り強^{あま}小^こ手^てを^を利^りを^を

とつあまはつと唯小ををらんべんまはたえんば
 目小たてて思ひれ外利をほるものこ
 られ功者乃所為なれはよるこころを利ゆ
 一子二リノオシとてたがひよ遊野一せめて
 もとや外小初をぶさふなる時チギルといふ
 事あり是の一考づ切て考をつつ子を
 チキルといふ是の時彼子二リノオシを捨る
 ありて打つるさ乃利ちとあらざり

一ヒキツケルといふたは一対をいふたは遊都
 小遊まらつて来るともよあは地を守りおご
 やのあは拍子よお合をれがむつや自然よ
 勢ひたがひては方乃平穩小代せうろく
 ともれをえり水をヒキツケルといふ
 一拳會小臨む人のつぎも志を張るを標
 けりもり勿論之今四五番山なりて大結びを合
 せと行司乃よらる時家と等しうと云ふを

其四五事乃申へさう加ると徳継全の教ふ
 足せん為何たりとも余の是く乃指を足せ
 かけを足せけるしは主務角より是此せ
 せ後乃大統び乃計畧と吾曾中ふおさ
 免足等り足せよをほつて吾指曲を曉
 らまはらるるうふをを用ひて一水を三
 セテツカフとらふ

一 吾行此全の教たといふあふ一巻もな

く世より二拳折るは對ふふより遊中も
 あり又遊まらうくもあり一歩は地道り
 お合ふもあり是の時乃密を次牙より見
 合むも二巻も折込さましく一子ま一
 こまぬるりあり志をさく指をさめあま
 してお合を以て自給小取付又を〇うも
 あり是の時まらうもふ小多ゆえなくお合是
 傳がまんづらうなるまけをうとつと對

おなれは巻物を捨てましたいふあてがふべし
を名ある人は出入一且捨て又出入する
あきども世にいと大よき事なりとて
一フルとてお對子のせうぬ指しつけざる事
をせよかきやあいらひおいつてももたざる
ものえ又世より解るさんとあはれ
む子をかきお對いのづらむらへ解るも
たえむ合せやある指しつて不屈又屈する

事ありお對のふよりてフルとてうへ糸を
とせあきばらむを引ぬ
一コエラスクとてハ巻物をかきむら指し
おとせやあきむらむらむらむらむらむらむら
らむらむらむらむらむらむらむらむらむら
くて追伏らむらむらむらむらむらむらむら
事なり對のむらむらむらむらむらむらむら
べらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

一ヨキ又へとらふに初出はつしゅつ一とふ小意せういをうて
 加ふるをいふかのヲレテとふ同どう一のうむた
 とふにむのふ目当めあてあふて意いをかふるも
 一とふを指さしをけうきい所謂いつわまふあなる
 一その小出せうしゅつ周章しゅうしやう一を致いたを致いたべ
 一身を刺さするをいふむうのむうより出いを指さ
 一を刺さえて出いをいふあなり 口傳くつでんアリ
 一ふをうつしを致いたるのれいむうのあ

一さぬ摺すりをうあへうけりぬる一 口傳くつでん

一ムテをたうう一 口傳くつでんあり

一右三條みぎさんじょう口傳くつでんと称なづするを敢あて秘奥ひおくあ

一アてとらふにあふを致いたしてさうか

一能あた由よし人口傳くつでんと次つぎは道みちを致いたふ人の知ちる

一なれい致いたして致いたべ

一五卷ごくわん乃折な詰づめとらふたふ一人と打う合あを中ちゆう

一ふの四卷しやくわん折な詰づめはとらふ小なる又むう四卷しやくわん

抄録に双方をいひ小成て勝る一巻を勝
負といふ又子あふ一巻を先をいふ時ハ先小四
巻抄録てたらふあふ方今勝る一巻を
取巻を勝といふなり

吾記に云ふに乃教條ハ法道必用乃ハ
なり抄録を撰て末書一いふ
後進の一助といふもの

風月外傳卷上終

